

# 戦争の時 平和の時

バックナー中将の死をめぐる人間の物語

上原正稔

## 目次

日記の裏に壮大なドラマ.....	3
常に前線で兵士を鼓舞.....	4
ヘルメットに三ツ星の輝き.....	5
住民説得して投降させたい.....	6
“三ツ星”を傍らの岩に.....	7
目の前で爆発倒れた将軍.....	8
将軍が砲弾でやられた！.....	9
目を開き一点を睨む.....	10
榴弾砲を構え大物標的を待つ.....	11
恩讐をこえ今は友人.....	13
付属資料.....	16
連絡先.....	17



サイモン・B・バックナー中将(沖縄にて撮影)

# 日記の裏に壮大なドラマ

## 真栄里の慰霊碑で涙

一天の下、全ての営みには時があり、季節がある。生まれる時、死ぬ時。愛する時、憎む時。殺す時、癒す時。戦争の時、平和の時。そして、全てが終わった時、真実の扉が開かれる。

ぼくは1995年「バックナー中将の日記」を琉球新報に発表した。バックナー中将の人間像を紹介したつもりだった。だが、それはあくまでも「日記」にすぎなかった。日記の裏には壮大な人間のドラマが秘められていたのである。

沖縄戦五十周年の95年の慰霊の日、中将の息子ウィリアムさんと娘メアリーさんが沖縄を訪れた。二人は糸満市真栄里のバックナー中将慰霊碑の前に立ち、祈りを捧げた。五十年前、父の訃報ふほうを陸軍士官学校の学生として冷静に受け止めたウィリアムさんだったが、父が死んだ場所に立つと、あふれる涙を抑えることができなかった。

97年と2000年の2度にわたって、ぼくはアメリカのウィリアムさん宅を訪ね、バックナー中将の遺品を見せてもらった。その中には中将自身が撮影した沖縄戦のカラー写真が含まれていた。琉球新報にはその一部が2000年に再度沖縄を訪れたメアリーさんによって紹介されている。

ぼくは今、グレン・ネルソンさんと共著で「将軍、戦場に死す時」と題する英語版の作品の原稿を完成させた。取材の中で、バックナー中将の死の原因が明らかになり、その死に深くかかわった1人の日本兵、石原正一郎大尉と知り合うことができた。詳細は後で、明らかにするが、ウィリアムさんと石原さんは今、友人として文通していることを記して本題に入ろう。